

### 28. Play and the Language of the Child

#### 子どもの遊びと言語

子どもの言葉を使用して、子どものペースで仕事をするのが重要である。

遊びは子どもの言語と言われてきた。

もし子どもが何かを描こうとしたら、あとで、お絵かきで何をしたかったか自分で管理させることである。彼は絵を保管したくて自分のために大事にしてほしいと頼んでくるか、または捨ててくれと頼むかも知れない。管理意識をもっていれば、子どもは彼が伝達したことへの不安は少なくなる

同じような対応を、玩具遊び、動物や数字遊びなどの他の形の遊びにも取り入れることができる。

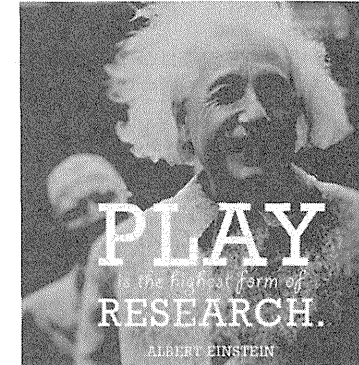
他のよく実践することは、ごっこ遊びで、子どもに何の遊びをするか尋ねると子どもたちはティーパーターやままごのようなことを喜ぶ。

動物の玩具は別の方法で編成されるかも知れない—ある動物は守る役とか攻撃する役というように。

こうした類の遊びは凡て、子どもにとって楽しいだけでなく、我々に洞察を得させ、理解をよりよくできるようにしてくれる。

### 29. PLAY IS ALSO HOW CHILDREN LEARN AND WORK THINGS OUT

遊びはまた子どもがどう学び、物事を処理するかなのである



### 30. Working with Difficult Behaviour and Strong Feelings

#### 困難な行動と激しい感情への対応

困難な行動は、子どもが他人を支配する手段として使われることが出来る。我々を著しく心配させるこのタイプの支配は、しばしば、子どもがトラウマに関係する恐怖と不安をどう処理しようと試みているからなのである。

我々にとっては、行動が主な迷惑行為のようにみえるかも知れない—子どもにとっては、いかに生き残り、制御できない不安を処理するかだったかも知れないのである。

我々は突然怒るか、子どもを罰する気になっている自分を見出すかもしれない。

我々は自分たちの感情について、子どもと一緒にいる時はどう変化するか、自分たちの感情と思考について考えることにより何を学べるかを考えることは非常に重要である。

ある子どもたちは、彼らについての重要な会議が開催されることを知る時著しく不安になるかも知れない。大人たちが集まって作っていることは、彼ら子どもは驚くことではない。彼ら子どもは、会議の開催を中止させようとするかも知れない。

### 31. Verbal Communication

#### 言語のコミュニケーション

研究によると、ふつうの日常生活で子どもたちと沢山話をする両親の子どもたちは、よくしゃべり、より大きな精巧な語彙を発達させている (Hart and Risley, 1995)。

話をすることは日常生活の中に以下のように築かれている。

- 何が起っているかを説明している
- 子どもがやっていることについて話し合う
- 質問をする
- 物事を一緒に説明している
- 原因と結果を結び付けている
- 気持ちに名前をつけている

健康な子どもは生物学的に、養育者に反応し、相合作用するように組み込まれている。

### 32. Helping Traumatized Children Communicate with Words 1 トラウマを背負う子どもたちに言葉の交流の支援

しかしながら、トラウマを背負う子どもたちは話すことに慣れていないし、自分たちの言うことに防衛的で慎重になっているかも知れない。

彼らは自分のニーズと気持ちを表すために使える語彙が、大変乏しいかも知れない。

これらの子どもたちと話す時、彼らは応答しないかも知れないし、応答したとしても、攻撃的になるなど、我々が期待しないようなやり方をとるかも知れないのである。我々にとって大事なことは、あまり挑戦的でないやり方で話すことである。

もし子どもが我々が賛成しないことや賛成しないというより理解できないことを言う場合は、我々は質問をし、物事を探ることが出来る。

もし子どもが例えば“ピーターがボールを殴った”と言いつけに来た時、我々は“ボールはどんな気持ちでいるだろうか”とか“どうしてピーターはそんなことをやったのだろうか”というようなことを言うことが出来る。

子どもは答えられないかも知れないが、我々は原因と結果、行動と感情をつなぐことに取り組んでいる。我々は、また、共感の発達も促している。

### 33. Helping Traumatized Children Communicate with Words 2 続き トラウマを背負う子どもたちに言葉の交流の支援

もし子どもが怒っているように振る舞ったら、我々は彼にその気持ちに名前をつけるのを手助けすることが出来る。

‘あなたがこのように振る舞う時は、あなたは怒っているのかどうか不思議だ’ または、‘あなたは今日、怒っているように見える。こうしてだんだんと、子どもに、逸脱行動より言葉で気持ちを表現する方法を見つけられるように支援してゆく。

‘私はピーターのことで頭にきたから、殴ってやりたい’ というように物事を話し始めることが出来る子どもは、著しい進歩をしている。

我々は、子どもに物事を予期し感情と行動を管理する責任をとりはじめるのを助けることが出来る。この前、あなたがこう感じた時大喧嘩をしたことを思い出して、あのことが起こらないように防ぐには何が出来るかなど。

我々は、子どもたちに言葉で伝えることの自信を持たせる支援を深山用意する必要がある。たとえば、もし子どもが他の子どものことを怒ったら、我々はあなたがこのことを話すのを助けてほしい、もし他の子どもがあなたのことを怒ったならあなたが怪我させられるのを絶対許さないよ、とすることが出来る。

### 34. Listening to Children 子どもの話を聞く

実際に子どもの話を聞くのは難しい。

我々は他のことで気が散っていて、完全に集中しなかったり、または聞いている話で不安な気持ちになったりするかも知れない。

もし我々がじっくり話を聞いて子どもの話を受け入れていれば、子どもはもっと大事なことを話してくれるかもしれないのである。

子どもの話を聞くのと同時に、我々は非言語的コミュニケーションと我々の心に引き起こされる感情にも注意を払う必要がある。

このことは語られた言葉以上に子どものことを我々に教えてくれる。

### 35. Listening to Children saying Difficult Things 難しいことを言う子どもたちに耳をかたむける

大人の我々に批判的で難しいことを言う子どもたちにも、我々は心を開いている必要がある。

我々は防衛的にならないように気を付ける必要がある。

虐待されてきた多くの子どもたちは、話しかけた大人たちから拒否された経験をもつことを思い出すことは重要である。

虐待された子どもたちの中には、もし彼らが誰かに話したとしたら、死のような深刻な結果を脅されてきたかも知れない。

子どもが我々になにか大事なことを言う時は、いつも我々はコミュニケーションを真剣に受け止めていることを示し、そっけなくしてはいけない。

子どもがコミュニケーションにより自分を変えられると信じはじめれば、子どもを励ます力となる。聞いてもらっている、理解してもらっている、真剣に受け止められていると感じることは、自尊心とレジリエンスを確立する上の重要な部分なのである。

### 36. Different Ways of Talking 1 話し方のいろいろ

我々はいろいろな方法で話をする。

おしゃべり—特別な感情を伴わない日常のことをただ話す。

- 日常のことで、感情を伴うことを話す— ‘今日は一緒に本当に楽しかった’ とか ‘あのお話には本当に悲しくなった’
- 重要な個人的な事柄を話す、事実の事柄を感情を伴わずに話す— ‘私が小さい時、お父さんによく殴られた’
- 重要な個人的な事柄を感情を伴って話す— ‘小さい時、お父さんはよく私をなぐり、本当に怖かった’
- 重要な個人的な事柄を感情と洞察を伴って話す— ‘私が小さい時、お父さんはよく私を殴り、本当に怖かったし、今も時々男性に恐怖を感じる’

### 37. Continued... Different Ways of Talking 2 話し方のいろいろ 続き

健康的で成熟した人々は、これらのいろいろなレベルの会話ができるし、異なるレベルの会話の適切な関係もわかっている。

トラウマを背負う子どもは、彼らのコミュニケーションが大変制限されているかも知れない。

彼らはただおしゃべりするだけか、もし、より個人的で内密なことを話せるとしても、彼らはこれを適切にやるやり方がわからないのである。

トラウマを背負った子どもたちがコミュニケーションの取り方を学べるようにするのと同時に、子どもにコミュニケーションの社会的役割を理解できるようにする必要がある。

### 38. Communication and the Child's Stage of Development 1 コミュニケーションと子どもの発達レベル

我々は子どもたちとのコミュニケーションの期待とそのやり方を考える時、彼らの暦年齢だけでなく、情緒発達の段階を一緒に考える必要がある。

我々は子どもが実際は2歳、7歳、10歳、14歳であっても幼児並みに機能している子どもに、重要な個人的事柄を感情と洞察をもって話すことを期待することは出来ない。

ブルース ペリー (Bruce Perry 2006a) が示したように、脳は神経学の手順で発達している。子どもは一つの段階が完成されるまでは次に移ることが出来ない。

最初のコミュニケーションは泣くなどの行動を通じた原始的なもので、それから感情やニーズを表すために言葉が使われ、そして、他人もニーズや感情をもっていることの認識が芽生えてくる。

最後に、脳の‘執行機能’が、複雑な抽象概念が理解され、通じ合うことが出来るように発達させるのである。この能力は小児期後期に達成され、成人期まで発達し続けるのである。

幼い子どもは‘自分たちの問題を語る’よりゲームで遊ぶ方が気分をよくするかも知れない。

### 39. Continued.... Communication and the Child's Stage of Development 2 コミュニケーションと子どもの発達レベル

もし子どもが相応の発達をしているのに、いつも意味のある話をしないでおしゃべりばかりしているように見える時、彼は何かを避けているのかも知れない。

これは何が起るかを恐れる潜在的な不安、危険という感じによるものかも知れない。

ここでの我々の仕事は、コミュニケーションをせかすよりも障壁を取り除くことである。

もし子どもが安全と感じていないなら、安全と感じるように助ければ彼はもっと通じ合うようになる。

もし子どもが果てしなくおしゃべりを続けているように見える時、もし注意深く聞けば彼がしゃべっていることの詳しい内容の中に重要な意味があることを認めることもまた大事である。その意味はすぐに明らかにならないかも知れないけれど、注意深い注目を通して我々は連結を始めるかもしれない。

#### 40. Continued.... Communication and the Child's Stage of Development 3 コミュニケーションと子どもの発達レベル

もし我々が子どもが潜在的には話すことが出来る重要なことがあるけれど伏せていることがわかったら、対応は思慮深く、やさしくする必要があります。

子どもにとって、たとえば自分の家族からの虐待やネグレクトのようなつらい、苦しいことを話すことは極めて困難であるかも知れない。

子どもが話し始めたとしても、つらい記憶が蘇ると同時に他の感情、たとえば、怒り、恥じ、罪悪感と悲しみも表面に出てくる。

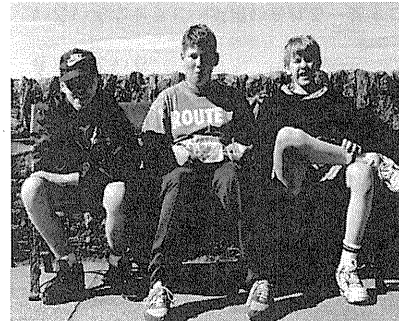
トラウマは同時に喪失を伴うが、これは気づくのが大変難しい。

親が自分を傷つけたことを悟る際に 巻き込まれる 喪失感を受け入れるより、子どもはその事実を否定し親を庇うのである。

子どもの感情は大変混乱し、ゆがめられ—たとえば、虐待について自分に責任があったかのように罪悪感を感じる—のである。

我々が聞く事柄のいくつかは、我々をも苦しめるかも知れないことを知っている必要がある。

#### 41. The Importance of Peer Relationships 仲間関係の重要性



研究では、子どもたちがどうかかわり、互いに仲良くやるかが子どもの発達で重要な役割を果たすことが示されている。(Shonkoff and Phillips (2000), Anglin (2002)).

幼児から若者にいたるまで、仲間とうまくやれる者はそうでない者よりより健康的に発達する傾向がある。

肯定的な仲間関係は子どもたちの肯定的な長期的成果の最も強い指標の一つである。(Shonkoff and Phillips, *ibid*).

そのため我々が子どもたちが互いにかかわりあえるようにするやり方が、我々の仕事で最も重要部分の一つとなっている。

トラウマを背負う子どもたちはこのことが一番難しいので、最初は沢山の支援が用意される必要がある。

#### 42. Supporting Children's Relationships 子どもたちの関係を支えるには

我々は、子どもたちを彼らがうまくやれそうもない状況に置かないことを保証するために、注意深くする必要があります。

我々は子どもたちが安全に遊び、互いに語り合う場所を提供する必要があります。

子どもたちが成熟すれば、支援とスーパービジョンのレベルを減らすことが出来る。

ある子どもたちには互いに仲良くやるのはどうするか、そして困難が発生した時どうかかわるかを大人たちが 手本をみせる必要があるだろう。

日常の私的な状況でも子どもたちに互いにかかわる機会を用意すると同時に、グループ会議などのもっと公的な機会も利用することが出来る。

#### 43. Group Meetings グループ ミーティング

グループミーティングのやり方として

- お互いになんをやっているかを話し合う
- 興味ある事柄、たとえば子どもが成し遂げた業績などを語る
- 我々がやりたいことの計画を練る
- 日常生活に関連した一般的なことを話し合う

グループミーティング は、皆が話を聞いてもらっていることを保証しながら、大人たちが思いやりのある尊敬をこめたコミュニケーションのモデルを演じる素晴らしい機会を提供している。

時折、もし子どもが話すことに何か困難がある時。大人が子どもに前もって話かけて助けてもらえることがわかるようにするのである。

子どもたちに困難なことを、ケンカしないで解決できるということを体験させることは大変重要である。

#### 44. Talking Groups 話し合いのグループ

私が働いていた治療的コミュニティでは、3～4人の子どものグループが30分間大人とただなんでもしゃべりたいことを（道理にかなった枠内で）話す‘話し合いグループ’を持っていた。

このことは、大きなグループでは話をするのが困難とわかっている子どもたちに特に役立っていた。

あるグループでは、男の子たちの一人が‘ディベアのしゃべるグループ’を提案した。

これは、遊びの中で象徴的なコミュニケーションを提供する機会となり、大変独創的な考えであることがわかった。

#### 45. The Context for Therapeutic Communication – Residential Care, Therapy and Life Story Work 治療的コミュニケーションの構成 施設ケア、セラピー、ライフストーリーワーク

これまで述べてきた多くの基礎的原則は、治療親、セラピー、ライフストーリーワークを含むトラウマを背負う子どもたちの治療的な仕事のどれにも関係している。

家庭の中で虐待とネグレクトの複雑なトラウマを受けた子どもたちには一治療的ケア環境は治療的対応の重要な部分となっている。

家庭環境の凡ての面は虐待を連想させるため、家庭環境は治療的作業が中で行われるための自然設定なのである。

“社会的背景の中で犯された傷からの回復は、社会背景の中で実現させなければならない”

Farragher and Yanosy (2005, p. 100)

#### 46. Therapeutic Parenting 治療親

トラウマを体験した子どもの世話をするケアラー（養育者）は、ただ子どもの親の役をするのではない。

ふつうの親の仕事は子どもたちに健康的な発達を用意することであるが、トラウマを背負う子どもたちは、普通の発達を取り戻すことと同様に、トラウマからの回復を可能とするような親業が必要なのである。

この仕事の重要な治療的性質を認めて治療親という用語が、英国のSACCSのような機関で、以前はカナダのブラウンデール (Browndale) で使われてきた。いろいろな方法で、この‘セラピー’は日常の生活場面で行われている。

#### 47. Therapy セラピー

しばしば子どもたちは、複雑なトラウマというほどではない特定の困難に関してはセラピーまたはカウンセリングが用意されている。

たとえば、1回限りのトラウマの出来事への対応や、精神保健の疾患という見地からとりくむ時。

しかし、トラウマを背負った子どもの複雑なニーズに1日24時間の集団生活の状況で対応してゆくには、個別セラピーとライフストーリーワークは回復過程で有益な役割を演じている。

セラピーは資格のあるセラピストと定期的に面接することで、たいてい、週に1～2回、子どもの困難な問題が彼の機能や発達をそれ以上に妨げないように明確な焦点を定めて働きかけている。

いろいろなセラピーが用いられる一話すこと、プレイ、アート、ドラマ

#### 48. The Benefit of Therapy セラピーの恩恵

セラピーの空間と人間関係は、日常生活環境から離れて、明確な境界を伴う集中的なプロセスを提供している。

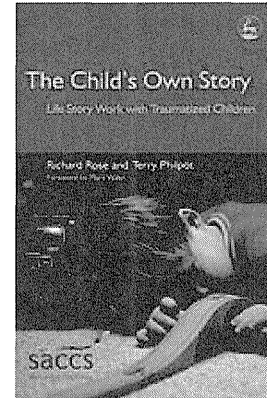
ある子どもたちはセラピストを本当に慕い、ホームの生活とセラピーを異なる目的で使っている。

ある子どもたちには自分たちの‘問題’や‘混乱’をセラピーに運び、そこに置いておくことは苦痛の緩和であり、一方、ホームは、育ちの糧を受ける場として使い分けているかも知れない。

実際には、ふだんその分離はそれほど明確ではないけれど、ある子どもたちには効果がある。

ある子どもたちはホームの外部の誰かに会うのを嫌がるが、これは過去の体験や個人的性格に影響されているかも知れない。

#### 49. Life Story Work ライフストーリーワーク (LSW)



LSWは特に複雑な生育歴を持っている子どもたちのために提供される。

無数の措置変更で恐らく沢山の親役の人々と沢山の同胞などを持った子どもは、自分の生育歴とアイデンティティに大変混乱した思いを持っている。

これが、子どもに関わる者は誰でも子どもの生育歴の凡ての知識を持つことが大変重要である理由の一つである。

且々の生活状況は、もつと現実的意味のある生育歴とまたアイデンティティを導きだし、子どもの生育歴の様々な面の仕上げに使われる。

しかし、その生育歴が特に複雑で子どもの知覚が大変混乱して歪んでいる子どもたちのためには、生活環境の中での作業は十分でないかも知れない。

#### 50. The Benefit of Life Story Work 1 ライフストーリーワーク (LSW) の恩恵

LSWは、子どもの生育歴の作業への、焦点を定めた、方法論的な対応を提供してくれる。

LSWは、子どもの生育歴を明らかにすることにかかわるだけでなく、もっと重要なことは子どもに自分の気持ちと自分の生育歴に関しての歪んだ見方への働きかけを可能にすることである。

ある子どもたちは自分の人生で何が起こったかを知るかもしれないが、その理由に大変混乱している。

たとえば、虐待されてきた子どもたちの中には、そうなったことは大人ではなく、自分たちに責任があると信じている。

ある子どもたちは、自分たちが‘悪い’‘ことをしたから社会的養護を受けている’と信じている。

#### 51. Continued.. The Benefit of Life Story Work 2 ライフストーリーワーク (LSW) の恩恵.....

ライフストーリーワーカーはその仕事の詳細についての研修を受けるが、セラピストの場合と同じように治療親の仕事と兼務しないことが大事である。

セラピーと同じように、ある子どもたちは別の場所で物事に取り組み、分離したことにより恩恵を受けるのである。

LSWの典型例は、1～2週間に1回、面談が行われ、ふつう、1年から18か月の間に終結する。

最後には、子どもは自分のLSWを所持し、それは彼らの生育歴の重要な記録として役に立つのである。

## 52. The Importance of Assessment and Integrated Working 1 評価の重要性と統合された仕事

子どもがセラピーやLSWを受けるかどうかということは、子どものニーズの評価に基づくもので、独断的な決定であってはならない。

子どもがセラピーかLSW、または両方を受ける時には、治療親、セラピスト、ライフストーリーワーカーは、統合された方法、または「連携して」(Cant, 2002)子どもの経験の凡てを一緒に支えながら一緒に仕事をするのが重要である。

治療親の仕事、セラピー、LSWの三つの治療領域は、凡て、トラウマを背負う子どもの回復への道のりを支えるために実際に重要な部分を演じている。

## 53. Continued.... The Importance of Assessment and Integrated Working 2 評価の重要性と統合された仕事...

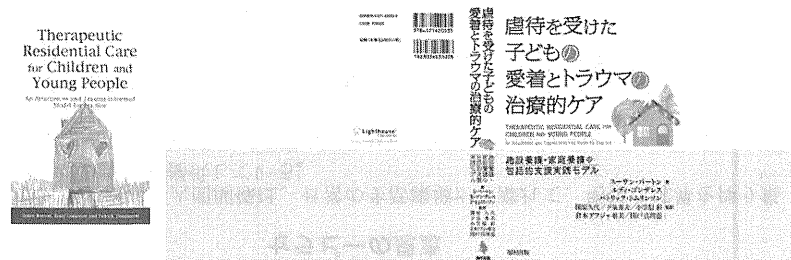
これまでに私が述べた治療的対応の三つの領域は凡て重要で、凡てが子どもに発達とトラウマからの回復を可能とさせる重要な役割を提供している。異なる領域の仕事の間に、地位という言い方での階層があると考えられていないことは重要である。

治療的施設ケアの仕事は、極めて複雑な1日24時間の作業で、その重要性は過大評価してもしきれない。この仕事にかかわるケアラー(養育者)や関係者は、自分たちがやっている困難で複雑な仕事を認められる必要がある。

不幸なことに、施設ケアラーはトラウマを背負う子どもたちの仕事にかかわる専門職の中でしばしば過小評価されている。時々、このことは低賃金、研修や支援の欠如、そして適切な昇進が欠如しているのである。

その結果、時々、施設ケアラーはセラピーとLSWの仕事が重要な仕事であるかのようにみている。施設ケアラーまたは治療親として彼らの技術を向上させることを熱望するより、むしろ彼らは、セラピストやライフストーリーワーカーとなることを熱望することがある。そのこと自体は悪いことではないが、適切な研修を受け、資格を所持し、治療親または施設ケアラーとして報いられる可能性もまたあるべきである。

トムリンソン氏たちの著書の翻訳書が 2013年12月に福村出版から出版されました  
Therapeutic Residential Care for Children and Young People: An Attachment and Trauma  
Informed Approach, Barton, Gonzalez and Tomlinson



Thank you very much  
for Listening to my Lecture

トムリンソン氏の連絡先  
Patrick Tomlinson  
[ptomassociates@gmail.com](mailto:ptomassociates@gmail.com)  
[www.patricktomlinson.com](http://www.patricktomlinson.com)

**An Evidence Informed and Outcomes Focused  
Model For Foster Care**

by  
**Patrick Tomlinson**  
October 2013

エビデンス情報と成果にもとづいた  
里親ケアのモデル

パトリック・トムリンソン  
2013年10月

日本語翻訳 開原久代

1

**1 Introduction** はじめに  
治療的ケアにおける重要な要素

明確な気風と肯定的な文化をつくる  
個別に評価し、プランをたてる  
子どもの実家族とかかわる  
計画と決定の際に子どもを関与させる  
仲間との肯定的な関係  
価値の一体感、プログラムの目的、行動と介入と組織の理論  
についての筋のおった理論的枠組みをつくり  
教育と学習と興味ある余暇を通じてレジリエンスを育てる

2

**2. Values 価値**

下記の価値宣言は、英国の里親養育の国の最低基準となる重要な原則を説明している。

- 子どもの福祉、安全、ニーズが、彼らのケアの中心になっている。
- 子どもたちは、優れた親業と教育の恩恵を受けて楽しい子ども時代を持つべきであり、幅広いチャンスを楽しみ、彼らの才能とスキルを伸ばして立派な成人の生活へと導くべきである。
- 子どもたちは、発達のニーズにあった愛情ある環境で成長する権利がある。
- どの子どもも自分たちの希望と気持ちを聞いてもらい、配慮してもらわなければならない。
- どの子どもも、個人として尊重され、アイデンティティと自信と自己価値を育てるために、個別のニーズとバックグラウンドにそって 個別のサポートを与えられるべきである。
- 障害のある子どもの特別なニーズや複雑なニーズをもつ子どもたちは十分に認識され、配慮されるべきである。
- 社会的養護児が、実親やきょうだい、異父母の兄弟、祖父母を含む大家族と接触をもち、関係を維持することの意義と、この中での里親の役割が認められている。このことを実現させるために、ソーシャルワーカーは、子どもの生家との接触の取り決めをする必要がある。里親に対してはその接触の準備や接触したあとの子どもへの対応へのサポートが必要である。

3

**3. Standards for Foster Care**  
里親養育の基準

- 里親ケアを受ける子どもは、よき親が自分の子どもを扱うように扱われ、不必要な制限のない、できる限りの家庭の生活と子ども時代の経験を満喫する機会をもつ資格がある。
- 子どもと里親の関係が最も重要であることが認められるべきで、また里親は子どもにかかわるチームのメンバーの核となる存在であると認められるべきである。チームは子どもの仕事にかかわるすべての人たちで、里親、ソーシャルワーカー、関係するセラピスト誰もが含まれている。時には、チームは里親と支援するソーシャルワーカーだけということもある。
- 里親は、子どもについて十分な情報を得る権利がある。
- 里親は、子どもに最善のケアを提供するために関連した支援サービスと発達の機会を受けることが絶対必要である。
- 里親養育にかかわるすべての人々の間の純粋な協力関係は、子どもに最善の成果をもたらすために絶対必要である。これには政府、地方自治体、その他の国の機関、里親サービス供給者と里親たちが含まれている。

4



#### 4.Children in Foster Care 里親養育を受けている子どもたちは

- ネグレクト
  - 身体的、性的、心理的虐待
  - ドメスティック パイオレンス (DV)
  - 親が重篤な病気 または死亡
  - 多数の委託不調
  - 学校からの排斥
- しばしば、乳幼児期にはじまり、子どもたちの人生につきまとうこれらの逆境は、子どもたちの発達にきわめて有害な影響をもたらしている。結果として子どもたちは次のような問題をかかえることになる。

5

#### 5. Continued... 子どもたちの抱える問題

- 行動が原因となり、家庭も学校もつぎつぎ混乱状態になる
- 性的不適切行動
- 精神保健の問題
- 反社会的行動—盗み、暴力、他人への攻撃
- 繰り返され、時に重篤な自傷や危険な行動
- 家出の経歴
- 愛着形成の困難 - 大人や仲間と年齢相当の関係がつかれない
- 人間不信による子どもの拒否的で敵意ある行動

- 診断として行為障害や情緒障害を伴う
- 著しい過覚醒状態か、ひきこもり状態
- 他人への関心の著しい欠如
- 発達遅れ
- 衝動コントロールやストレス耐性の乏しさ
- 複雑なトラウマやPTSDのサイン
- 乏しい自己評価とアイデンティティの混乱
- 清潔など基礎的な生活のスキルの欠如
- 動物への残忍性

これらの子どもたちにとりむ里親は、レベルの高い支援が必要である。

6

#### 6. History and Assessment 生育歴と評価

- 子どもの里親養育を考える際、子どもの人生と経験の完璧な生育歴が必要となる。子どもの生育歴は、彼らのニーズの本質と様々な困難の根源の解決に役立ち、次のことが含まれている。
- 子どもの身体的、精神医学的生育歴
- 子どものトラウマとなった特別な出来事
- これらの出来事の中の子どもの役割と考え方
- 子どもの認知機能と情緒発達のレベル
- 子どもの難しさの度合い
- 子どもの習癖
- 子どもの特別な個人的強さと能力
- 子どもの文化と宗教的背景
- トラウマを受けた子どもの仕事では、生まれて1年間の“両親”とその他の養育者との関係を理解することが特に重要となっている。

7

#### 7. The Importance of Gathering Information 情報集めの重要性

日本では、子どもの明快で完璧な生育歴を入手するのがかなり難しいと聞いている。こうした困難には、子どもの生育歴を知ることによって乗り越える必要がある。

この領域の進歩は、ソーシャルワークのレベルが鍵となる～里親が現在の状況の中でやれることは限られているからである。

情報がなければ、子どもの発達のレベルと機能の評価が役に立つ。

評価は、ソーシャルワーカーによって計画され、精神科医や心理士などの他の専門家の関与も必要である。

8

## 8.Aims of Foster Care

### 里親養育の目標

目標は、子どもたちが、かれらの経験から立ち直り、  
以下のような健康的な発達を取り戻すことである。

- 身体的、情緒的な健康
- 学習や学問の達成
- 健全な人間関係と愛着関係を形成する能力
- 実家族との関係形成
- 未来への希望

9

## 9.The Influence of Different Parenting Qualities on Child Development

### 子どもの発達に影響をもたらす様々な親の資質

「親たちは子どもたちと建設的にかかわれる個人的能力と、家庭の内外的で彼らの生活を管理する組織的能力と、子どもたちが必然的に呈する多くの挑戦に対処できる問題解決能力をもたねばならない。これをうまくやるには、子どもへの感覚の鋭さ、子どもが何を必要とし、世の中にどう反応しているかを読み取り、解釈し、予期する能力を必要としている」 Shonkoff and Phillips (2000)

### 肯定的な親の資質

- 探検を奨励し、(対照的なのは極度に拘束する親)、豊かな言語的環境を提供する
- 慈しみ深さと温かさを備えている
- 遊びのある教育的環境
- 会話が豊富
- 安全と自由の探究にバランスがとれている

10

## 10. What Children Need from Parents 1

### 子どもたちが親たちから必要としていること 1

- 大人に確かな安心感をもてるようにする信頼できる支援
- 若い子どもの実力と効力を強めるような対応
- 子どもたちが恐れている危険や、気付いていないかもしれない脅しから守る
- 若い子どもが自尊心を育ててゆけるような愛情
- 人間の葛藤を共同で体験し解決する機会
- 子どもの手が届くところにある新しいスキルと能力を伸ばすのを支援
- 子どもたちが互いのギブアンドテークの積極的交際から学ぶ相互の交流
- 他人から尊敬され、他人を人間として尊敬する経験
- 感情について話し合い、気持ちに名前をつけ、他人はどう感じ、どうしてなのかを理解するように感情の理解を助ける
- 子どもが、自分の気持は必ずしも他者と同じでないことを認識するのを支える。これは社会理解と共感の発達に不可欠な基盤形成となるが、健全な発達に大変重要である。
- 共感と他人への理解を発達させるためには、子どもはあらゆる経験の第一に養育者からこれらの資質を伝えられなければならない。

11

## 11.What Children Need from Parents 2

### 子どもたちが親たちから必要としていること 2

- 子どもたちは自分のペースで進む必要があり親たち等からの過度の押しつけがましい行動は子どものやる気をそぐ。
- 批判や命令は、褒めたり、励ましたり、助言や情報を与えたり効果的な方法を示すようには効果的でない。
- 子ども時代を通して葛藤は健全な発達の正常部分である。
- 親たちがどう葛藤を処理しているかは若い子どもたちに、他人の気持ちや、有能な社交術やどう交渉し協力するかを学ぶ上で役にたつことができる。
- 葛藤との関係の中での上手な親の役割は、共感と社交への成長基盤を提供し、同時に交渉力と他人との葛藤をうまく解決するスキルを磨いてくれる。

12

## 12. What Children Need from Parents 3 子どもたちが親たちから必要としていること 3

- 子どもたちは成長すると、独立性を保ち、自分たちの選択が可能に大きなスペースを必要とする。
- 子どもたちは、やらされるのではなく、自分がやりたいから何かをやるという感情により動くようになる。
- 暖かい養育者は、絶えず強制されている子どもの行動にはっきりと期待をもち、同時に早期の良心の発達もうながす。
- 親の前向きな社会的モデルは、子どもに道徳的な責任ある行動を示す重大な役割を果たす。
- 目覚め、睡眠、食事、入浴の世話などの日課は期待をはっきりさせる有効な方法である。これは絶え間ない葛藤を減らし、日常生活の予期できる流れの中で子どもにどう協力するかを学ばせることに役立っている。

13

## 13. Peer Relationships 仲間との関係

- 親が子どもに温かさや筋の通る対応をしていると、子どもたちは仲間にも人気があるし、思いやりと温かさをもつようになる。
- 断定的な権力と一貫性のないしつけ、放任、わがままを経験した子どもたちは、仲間とうまくやってゆくのが難しく、攻撃、怒りの行動を示しやすい。
- 他の子どもたちと関係を築くことは、小児期早期の主要な発達課題の一つとなっている。この課題をいかにうまくやるかは子どもにかかっている。自分の価値、能力、世界は楽しいか敵意に満ちているかの見方を評価する背景をつくっている。また、将来の発達に重要な影響をもつ。
- 小児期早期の仲間との交流の型は、小児期中期と思春期に、子どもたちが能力を示す道をゆくか、逸脱するかを大きく予言している。

14

## 14. Education and Learning 教育と学習

- 学習は発達の中心となる。生まれたばかりの赤ん坊は、最初の養育者との関係を通して学習をはじめます。
- 親の子どもたちとのかかわり方、学習と子どもたちの能力への親の信念、家庭環境の中の資源すべてが重要な役割を担う。
- 適度の注目、応援そして励ましがあれば、子どもたちは促さなくても自然に遊び、学んでくれる。
- 子どもたちは、一般に親業の練習の恩恵を受けるが、豊かな相互作用を沢山体験し、いろいろな学習教材の経験と、同時に沢山の考えをためず機会に触れるからである。
- 読み書きや数量的スキルの早期取得に特に重要なことは、物語を読んだり、数字概念を含んでいる盤ゲームのような活動で言語と社会性の交流をはかることである。

15

## 15. Children develop in a way that is neurobiologically sequential 1 子どもたちはある意味で、神経生物学的な成果として成長する 1

- 身体機能の管理
- 感情の調整
- 認知的に考える能力の発達
- 考える時に感情と抽象的概念を結びつける

管理的な(思考)機能は、子どもが環境の中の関連した重要な事柄と向き合い、出来事を予期したり、抽象的に世界を表現できるようになるまでは、現われてこない。

16

## 16 Children develop in a way that is neurobiologically sequential 2 子どもたちはある意味で、神経生物学的な成果として成長する 2

3歳から7歳の間に子どもたちは、自己統制と自ら反省する能力とともに、社会との関係の理解に大きな進歩がみられる。

脳の発達の研究によると、このプロセスには近道もなければスピードを速める方法もないことがわかっている。しかし、地球上の親たちは主に子どもたちとかかわる方法を通して子どもたちの発達を効果的に促進させている。

機能不全の親業は、子どもの自己統制の問題の原因となり、脳が順序どおりに発達する際、ひとつのステージでの困難が次のステージの困難を導くことになる。

虐待や重篤なネグレクトを受けた極端な事例では、子どもの発達はゆきづまって次のステージに進まない。長引く著しいストレスや不安は脳にコルチゾンとアドレナリンを溢れさせるが、それは脳を凍らせることになる。子どもは絶え間ない不安状態に閉じ込められる。

しかし、正しい状況におかれれば子どもたちは高いレベルのレジリエンスと回復への能力を示す。

17

## 17. Resilience 回復力

絶えず側にいて心をくわいてくれる大人の存在は 人生早期に心身を害する状況に屈服していたであろう子どもたちに、きわめて元気づける影響をもたらす。レジリエンスという考え方は、子どもの発達や、発達に混乱を伴った子どもたちがどう回復するかを理解の中心となっている。

社会的養護を受けるまでに多くの子どもたちは無数の危険因子に曝されている。子どものレジリエンスに基づく仕事は、子どもが持つ力と肯定的な面の確認に焦点をあてる。

ギリガン (Gilligan 2000) は、レジリエンスの3つの源を、安全基地、自尊心、自己治癒力と特定している。

教育の成功は、子どもたちに逆境の体験を克服し、レジリエンスを強めるという最も明確な方法のひとつとなることが出来る。独立した生活に移行する前の教育の成功は、明確な成果と関連することが明らかにされている。

18

## 18. The following key points have been found to promote resilience 下記の要点がレジリエンスを強める

- 強力な社会的支援ネットワーク
- 少なくとも一人の無条件で支えてくれる親か親の代理の存在
- 確実な学校体験 - 子どもの教育の達成を支えることは、長期にわたりレジリエンスと確実な成果をもたらす上に大変重要
- 克服する気持ちと自らの努力が違いを生み出すという信念
- 様々な課外活動の参加
- 破壊的な影響ばかりでなく有益なことも認識されるように、逆境を組み替える能力
- 他人を助けることで“違いが生じる”能力と機会
- 挑戦的な状況からは避難するより、むしろうまく処理する力が育つように支える

そうした活動には下記のことが含まれる

- 動物の世話をする
  - スポーツや他の余暇活動
  - 表現と創作芸術
  - アルバイトやボランティア活動
- 社会的側面の活動は、その中に含まれる特別な技能だけでなく人間関係の能力を築くのにも役立つ。そうした活動は、正常な生活感をもたらすので、アングリン (Anglin 2002) は社会的養護下にある子どもたちに大変重要であることを見出している。

19

## 19. Trauma Theory 1 トラウマ理論 1

小児期のトラウマは、ネグレクト、虐待、その他子どもの発達を著しく破壊する衝撃をもつ拒否的な経験などの状況を意味すると理解されている。

これらのことが繰り返し一定期間続けば、子どもは複雑なトラウマに苦しむと記述されている。これらの子どもたちは、

- しばしば人間関係を築くのが困難
- 彼らは著しく警戒心が高いか、反応しやすいかである。
- 彼らはしばしば、他人の行動を脅迫、不公平、意地悪ととらえる。
- 固くなって、状況や人々にくりかえし同じ敗北宣言で応じる。
- 彼らはトラブルや危機の騒動をひきおこす。
- 彼らはしばしば激しく制御不能で、絶望的になり、これらの感情をどうすることも出来なくなる。
- 彼らはしばしば、疎通不能で、冷たく、世話をよせつけず、無感情のようにみえる。

20

## 20.Trauma Theory 2

### トラウマ理論 2

トラウマ理論は、繰り返しトラウマで苦しむ高度の支援が必要な子どもたちのケアを支える有益な理論的枠組みを提供してくれる。

トラウマ関連の文献は、子どもの発達する脳はいかにトラウマ体験の影響を受けるか、発達にもたらす衝撃、そして回復できるように支援する取組を説明している。トラウマの枠組と子どもたちに起こる適応行動の理解がなければ、支援が治癒よりむしろ不必要にトラウマをもたらすことになる。

トラウマを受けた子どもの仕事は複雑で“早期の人生の体験と認知機能、社会性、情緒、身体の健康の間の消すことのできない関係”を理解することが必要とされている。

子どもの発達と同じでトラウマを受けた子どもの仕事は人との結びつきが基礎となる。

子どもたちは人との結びつきの関係の中で発達する。

21

## 21.Re-enactment of Trauma

### トラウマの再現

トラウマを受けた子どもは自分たちが体験したトラウマを再現することがあり得る。

たとえば、子どもは過剰に警戒的になっていて自分を守るために日常の普通な出来事に防衛的に反応するかも知れない。子どもが反応している状況は実際には危険でない保護的な内容であるから、反応は事実をゆがめた結果となり子どもが得られるはずの支援を受けられなくしてしまう。このように、トラウマを受けた子どもはますます孤立することになる。

子どもにかかわる養育者たちが、トラウマの知識を持ち、それが子どもと養育者たちにどんな衝撃を与えるかを理解していれば、子どもの問題に潜在する原因に断固として向きあうことができる。このことは、子どもが確実な生活の変化を得るのを効果的に支えることを可能にする。

トラウマとそれがもたらす衝撃を理解することは、その再現を引き起こすのを避けるのに役立つ。これは、研修、スーパービジョン、対策の展開によって達成できる。計画された一定の明快な方法を持っている養育者たちは、誰かが合意された枠から外れた時に、互いに理解しあい踏み込んで支えることが出来る。こうした理解は適切であれば子どもとも分かち合うことが出来、異なる状況で子どもが自分の反応を認め、調整する能力を養うことに役立つのである。

22

## 22.Working with the impact of trauma

### トラウマの衝撃への取り組み

トラウマを背負う子どもたちに取り組む機関では、トラウマとその衝撃の理解に役立つ研修やスーパービジョンなどの公開討論が必要である。子どもたちはしばしば集中支援が必要であり、世話をしている養育者たちもまた特別なサポートが必要であります。

トラウマを受けた子どもと若者たちをどんな思いやりと愛情でケアするかを、より深く理解する際に、養育者たちが自分の苦痛を扱える能力を備えることが挑戦となっている。

トラウマを受けた子どもの対応での特別な特徴の一つが子どもの過去の体験が現在再現されるという点である。

“養育者にとっては、彼らの困らせ行動を、この子たちは悪くて、卑劣で、病的で、狂っていると見ることは簡単である。時々見落としていることは、傷ついた子どもたちは繰り返し「昨日」のトラウマ体験を今日の養育者にぶつけていることである。十分な研修を受けていない養育者が過重労働とストレスの中にいると、この再現に巻き込まれ、自分たちが助けようとしている子どもたちに再度トラウマを与える危険を冒し、割り当てられた役割を逸脱するのである。” (Centre for Excellence in Child and Family Welfare, 2006)

23

## 23.Specific skills and qualities relevant to looking after children

### 子どもの世話をするのにふさわしい特技と性質

- 子どもにかかわる包容力
- 個人的安定性と情緒的成熟
- 子どもに関心があり、子どものそばで遊ぶのを楽しめる
- 挑発に巻き込まれても自由に抵抗できる
- 子どものよい役割モデルとなる
- 子どもの教育的ニーズを支えるレベルの教育がある
- 近づきやすく、オープン
- 直観的で敏感
- 完全な人格と信頼性をもつ
- 挑発的な行動に効果的に応じる能力

24

#### 24. Different Levels of Foster Care 里親養育の異なったレベル

適切な里親を選別すると同時に、里親の異なるレベルを見分けることも重要である。

ある里親はニーズの高い子どもたちの面倒をみる事が出来るかも知れない。

ある里親は年長の子どもの委託が適任であるかも知れない。

有能さと同時に経験も考慮しなければならない。ある里親は特に労力を要する子どもたちの面倒をみる事が出来るという経験を重ねている。

新人の里親では、実際的方法ではじめることが重要となるので、子どもと里親のマッチングを注意深くすることが大事である。

異なる子どもたちのニーズを考慮に入れる際、里親の興味もまた重要となってくる。

25

#### 25. Foster Carer Support 里親支援

著しい人生の破壊を経験し、しばしばトラウマを背負っている子どもたちを世話することは、報われることもあるが、極めて挑戦的である。同時に我々には子どもたちと同じように里親たちの健康を保証する義務がある。

ペリイ(1999, p.9) のコメントは、里親養育の中の子どもへの仕事にもあてはまる。“乳幼児と児童のための最善の介入は、直接世話をしている大人をねぎらうことである。”

Bruce Perry, 1999

養育者たちがその仕事を支えてもらうことは、かれらの幸せだけでなく同時に子どもたちの回復にも極めて重要なのである。

同じことが里親養育にも真実と言えるが、子どもたちの成功的な成果は、支援とスーパービジョンと研修に高いレベルの注目がそそがれることによるものである。

26

#### 26. Retention of carers is influenced by a wide variety of factors ケアラー（養育者）の保持は様々な要因に影響される

- 子どもへの仕事に何が起きているかを認知して気遣う管理体制
- ケアラーの力量への評価
- 困難な部分の彼らの仕事が支援される
- 適切な資源と支援が提供される管理体制
- 得られる支援についての特別知識の研修
- 仕事を実行するための明確なガイダンスと情報
- 内部の刊行物と進行中の研修の利用
- 子どもにニーズにふさわしいレベルのスーパービジョン
- 里親グループと実家族合同のイベントのネットワーク支援
- 子どもに特別なニーズがある場合の専門家サービス利用
- 適任の経験者が待機する支援一困難な時の相談と必要なら更なる支援の手配が得られる

27

#### 27. Supervision スーパービジョン

- ケアラーを支える不可欠な要素は、信頼できるスーパービジョンにあることは大分前から認められている。それは子どもの仕事を振り返る機会と指針と支援を与え、受け手に関連した情報に気づき、支援と発展のための自分のニーズを見出すことを確実にするのである。
- スーパービジョンの異なる要素のバランスをとることは、指導者に要求される挑戦でありスキルである。
- 里親へのスーパービジョンは支援ソーシャルワーカーによって提供されるべきである。スーパーバイザーは、子どもの発達、里親であることの挑戦そしてトラウマ理解の堅実な知識と経験を持つべきである。

28

## 28. Important functions of supervision スーパービジョンの重要な機能

- 発達の機会を用意し、スキルと、介入の枠組みの概念理解を高める
- 子どもとの仕事、困難な経験、得られた進歩について一緒に考える
- ケアラーたちに“自分たちのケア”をすることを勧め、彼ら自身の健康を管理し、身代わりのトラウマの衝撃を認め、抜け出ることをすすめる。
- ケア環境の中では、トラウマの再体験を誘導するような方法でトラウマの再現が起こる傾向がある。スーパービジョンは、トラウマ再現の可能性を理解するように仕事の中に含まれる力動関係を探るようにすることが不可欠である。

29

## 29. Reflective Practice 振り返りの演習

受け手の成長に関係するスーパービジョンの重要な仕事のひとつは、振り返り演習である。これは、ケアラーが自分の経験を振り返ることができることで、異なる経験の側面を繋げることであり、一たとえば、現在起こっていることと同様に、子どもとケアラーの過去の出来事が、子どもとのやりとりに含まれる感情に共鳴していることに気づくことである。

ケアラーに自分の経験を振り返って探索する機会を与えるのと同様に、スーパーバイザーはケアラーの仕事の中で、またスーパービジョン会議の中で何がおこっているかを考えながら、振り返り演習のモデルを演じている。

振り返り演習で提示された見通す力は、否定的なパターンの展開を防ぐことが出来る。

振り返り演習は、ケアラーに子どもの肯定的な行動（とストレンクス）を見ることと、絶えず否定的な相合作用に捉えられるのを避けることを支援することが出来る。

30

## 30. Training 研修

エキスパートのジム・アングリン (Jim Anglin 2002) は、「トラウマを受けた子どもたちのケアと治療という最も複雑でつらい役割を持つ人たちが、仕事のために、少しだけか、多くの場合全く特別な研修を受けていないということは心配すべき事実」と述べている。

複雑なニーズと困難を背負っている子どもたちに関わる人々の研修は、ただ何をするかを示すだけでなく、なぜかを説明する奥行の深さが必要である。ワーカーたちは広い様々な状況に応用出来る理解力を養う必要がある。

英国の専門里親サービスの管理所長のホワイトウェル (Whitwell 2010) は、研修の重要性を下記に強調している。

「愛情だけでは十分でない。多くの養育者は、なぜかわからなくても直観的に正しいことをしている。ただ、根底にある情緒障害（怒りのパニック、破壊、罪の意識の欠如、人格の分裂）の症状である行動を理解する研修を受けていなければ燃え尽きてしまうだろう。」

31

## 31. Training – theoretical base 研修—理論的基礎

### 関連する理論の範囲

- 子どもの発達
- 愛着理論
- 喪失と深い悲しみ
- トラウマ理論
- 神経科学
- トラウマ理解のケア
- 精神力動論

### その他の重要な研修領域

- 子どもの保護
- 子どもの権利
- 特に思春期関連の精神保健
- コミュニケーションと関係づくりスキル
- 危機管理
- 子どもの特別なニーズ
- 実家族とのかかわり方
- 個人のふりかえり技能の開発

32

### 32.Key features in training on trauma トラウマ研修の重要な要点

- トラウマの原因と結果
- トラウマの記憶の特質
- 人間の脳の発達の特徴
- トラウマ体験とその脳発達への影響
- トラウマの生態学
- トラウマの進行中の生理学的な症状の認識
- トラウマ関連の行動での認知、言語機能の認識
- 否定的な自己敗北行動の確認
- 否定的な人生観と自己敗北的行動に挑戦し、枠をつかえる
- 建設的なもう一つの行動を選び発展させることを支援し、励ますやり方でトラウマ関係の行動を処理
- 暴露されたことを適切に管理する
- 身の安全と同時に情緒、心理的安全を創り出すことの必要性和、どうやるかの理解
- 彼らの虐待体験の（直接的、二次的）凡ての否定的側面と対決できる一全体的に頼れる、安定した生活環境
- 失った発達に追いつく前に、過去の不正に対して激しい感情や怒りを持つ子どもたちには安全を確保
- そして逆転移や相手への攻撃的衝動を理解し、処理する

33

### 33.Therapeutic Approaches 治療的対応

遊びと好奇心を奨励する

遊びは子どもの発達重要な部分であり、人類学者のジョージ ドルシーが言ったように、遊びは知識のはじまりである。

遊びは子どもの言葉と言われてきた。

クリフォード ポストン (Clifford-Poston 2001) が要求したように、子どもが発達するためには、安全基地と好奇心の強いことへの許可が必要である。トラウマを受けた子どもたちは、しばしば不安があまりに強く好奇心を示せないで、我々が支援できる仕事の一つは、適切な方法で彼らの好奇心を刺激することである。

それで我々は、まわりに興味あるものがあり、子どもが探検したり遊んだり出来る環境をつくる必要がある。我々は、子どもたちに実験することを許し、散らかしたり、汚したりすることに過度に神経質になって止めさせることがないようにする必要がある。好奇心と遊びを促すためには、誰かと遊んだ経験が非常に乏しかったかも知れない子どもたちに寄り添ってケアラーたちが遊び上手であることもまた重要である。

34

### 34.The Home Environment ホームの環境

多くのトラウマを受けた子どもたちは喪失体験をしているので、ホームは、学習と娯楽をかねたよく選ばれた本、玩具、ゲーム、スポーツ用具、コンピュータ、音楽に囲まれた豊かな環境であるべきである。最も大事なことは、子どもたちには遊びが大事なことを理解し、かれらとのかかわりの中で遊び的なことをすすんで出来るケアラーが必要である。

ホームは刺激的な環境であるべきであるが、虐待によるトラウマを受けてきた子どもたちはしばしば著しく過剰に刺激を受けやすくなっている。

ウイニコット (Winnicott 1964) が健全な発達のために必要と助言した“少量づつ”世の中に紹介されてゆく代わりに、彼らはまだ情緒的にそうした経験に対処する準備が出来ないよりはるか早くから日常生活の出来事に曝されてきたのである。

ウイニコットはこのことを、子どもの前進する自我の感覚への堪えがたい侵害であると述べている。結果として、子どものストレス反応は過剰に刺激され、子どもは過覚醒状態に常時導かれるのである。

35

### 35.Recreational Activities レクリエーション活動

子どもに毎日の事柄から離れてレスパイトを与えることは、極めて大事な方法である。

困難なことについて話すことが常に唯一の、または最善の子どもの気持ちを理解する方法と思いきひは間違っていることがある。

身体機能の熟達の機会を与える活動に参加することはとても元気を回復させ、否定的な感情のバランスを保つのに役立つ。

最近の研究ではいかに運動が身体の中に、様々な化学物質やエンドルフィンなどのホルモンの分泌を増やし、我々の健康感を高め、うつの感情の形成をやわらげるかが示されている。

互いに積極的に楽しむ体験を共有することは、関係づくりのすばらしい方法である。

36



### 36. Working with Trauma トラウマへの働きかけ

治療的対応は、子どもたちが彼らのトラウマ体験と発達に与えた衝撃から回復出来るように特に焦点をあてている。

子ども時代のトラウマは、脳の発達に有害な影響をあたえることが研究で証明されている。

成功的な治療には下記のことが含まれている。

- ・ 安全で、押し付けるものではなく、出来るだけ子どもの手に残した権限をもつ関係をつくること
- ・ 子どもをサバイバーとして尊重し、彼らは最善を尽くしていると信じる
- ・ 過去と現在の間の連続感の展開、葛藤感情への我慢力、以前のトラウマの解離を完全に思い出せることを含めて気づきの統合を促進させるテクニックをつかうこと

37

### 37. Difficulties of Traumatized Children トラウマを担う子どもたちの難しさ

トラウマを担う子どもたちは管理が必要な難しい行動を伴うため、治療的環境は、根底にあるトラウマを理解し解決することに焦点をおいている。

“これらの子どもたちにとって彼らの苦悩と情緒不安定の主な証拠は、かれらの危険で自傷的で予期不能な行動にあるかも知れないが、しかし、この行動は彼らの生活を安定させるために管理される必要があるけれど、単なる行動の規制は、必ずしもこの行動の根底の原因の解決にむすびつかない、それは多くの場合、家族歴と家族関係に根ざしているからである。” (Ward, Clough and Bullock, 2006)

トラウマを担う子どもたちはしばしば、重要な愛着障害を伴い、これに関係して情緒の調整に困難を伴っている。情緒の調整は、ふつうは、子どもが自分の感情を調整できるようになるまでは主な養育者との愛着関係の中で処理されている。

情動の興奮を調整するための個人的方策は、これらの早期の体験の影響を埋め合わせるのに役立つ。

35

### 38. Emotional Regulation 感情の調整

子どもたちがトラウマの再体験から守られる安全で予期可能な環境を準備することが、子どもたちの感情が調整出来るようにする第一歩である。

トラウマを担う若者はたえず、解離と防衛と過覚醒（たとえば、実際または知覚上のストレス状況に過敏になる）状態の中で生活する傾向がある。

神経学的な事実は、この複雑なトラウマは脳の発達に衝撃を与え、その結果深刻な神経学的欠陥を伴う結果となることを指摘している。

結果としてトラウマを担う子どもと若者たちは、深刻で慢性的な感情と行動の調整不調を表面化させ、再調整を促すために長びいた支援と、最終的には、かれらの激しい感情状態の自己調整を必要とする。

もっとも基本的レベルで、このことは安全で親身な環境の中で、安心でしっかりと愛着をとおして達成される。

39

### 39. Pain-Based Behaviour 苦痛に根ざした行動

トラウマを背負った子どもたちの問題行動はしばしば逸脱行動として紹介されている。逸脱行動という用語は何が逸脱しているのかという疑問を暗示している。

アングリン (Anglin's 2002) は、しばしば内在化された苦痛が引き金となった結果としての“逸脱行動”と“うつ病”のような内的過程に“苦痛に根ざした行動”という用語を使っている。これは行動の基にある意味に焦点を移すことに役立つ。

トラウマを背負った子どもたちにかかわる仕事は、とても挑戦的で、ケアラーの自分史と共鳴して強い感情と時には圧倒されるような情動を導き出す。そのため、ケアラーがこの熟練を要する繊細な仕事を成し遂げるためには、レベルの高い研修と支援が不可欠なのである。

ケアラーの反応の核心的要素（・子どもの経験を信じて確認する・子どもの感情を大目にみる・ケアラー自身の感情反応を処理する）

40

#### 40. Consequences, Sanctions and Rewards 1 結果、罰、褒美

これはしばしば、家庭外養育で子どもにかかわる仕事の中で、最も困難なことのひとつである。権利と責任の関係の中で、挑発的な行動への対応の方法、その結果と罰は特に重要である。このことは、また大変複雑な仕事の領域である。

我々がかかわる子どもたちの多くは、しばしば不当で、彼らが理解できない理由で罰せられることに慣らされている。彼らは、子どもの行動に対してというより、大人の気分によって何回も罰せられたり、残酷な扱いを受けてきた。

トラウマを背負いストレスへの反応が過敏状態になっている子どもたちにとって、罰はしばしば物事を悪化させる。ストレスのレベルを高め、世間を敵意のある、容赦しない場所という否定的な視点をさらに強めるのである。

何が受け入れられるか、何がだめなのかを明確に予測することが、一般的には、もっと効果的である。子どもが一線を越える時、彼らにそのことを考えさせ、正しいやり方を見つけてさせるのである。彼らがやった傷つけたり、破壊したりの出来事の修復には、それを元通りにすることに貢献する体験を用意することである。

41

#### 41. Consequences, Sanctions and Rewards 2 結果、罰、褒美

トラウマ体験をした多くの子どもたちは、自分たちの過ちや否定的な行動が、破滅的で長期にわたる有害な結果となることを信じている。このことを彼らは、小さな失敗が養育者からの厳しい罰や虐待となった体験を通して学んできた。あるケースでは、困難な行動が別の委託不調につながってゆくのである。

罰せられるのではなくむしろ修復をなしとげる能力は、他人への共感と気遣う気持ちを持つことが要求される。情緒的な発達が遅れている子どもたちにとっては、他人への何らかの純粋な気遣いが出来るようになるまでに時間がかかるかも知れない。子どもが他人に気遣いや心配を示すには、彼らが気遣われ世話をされた経験をもつ必要がある。

我々は子どもと、彼の行動やそれを他人はどう感じているか議論することにより、共感の発達をうながすことが出来る。ペリーとザラビッツ (Perry and Szalavitz 2010) は下記のような助言をしている。

“共感を奨励するには、理性にもとづく規律、将来の展望、適切な結果の一貫性そしてなにより愛が必要”

”もし、あなたが子どもたちに理性に基づいて行動することを教えれば、彼らは恐らくより分別をもつだろう。”

42

#### 42. Consequences, Sanctions and Rewards 3 結果、罰、褒美

ドッカー ドライスデール (Dockar-Drysdale 1953) は、罰による対応は、子どもの他者に対する気遣いの能力の発達を実際には破壊すると論じている。

“罰は、自然な回復の過程を期待するのではなく妨害し、恐らく封じ止めてしまうので、子どもの罪の意識につながる憎しみの感情が建設的な方向に切り替えられるように予防し、回復を促す必要を提案する。”

トラウマを受けた子どもたちは罰せられ、屈辱を受け、傷つくことを熟知している。そういう子どもを罰することは、彼のこれらの体験の記憶への引き金を引かせ、彼を罰する人には誰でも怒りと恨みを感じさせる原因をつくるかも知れないのである。

熟練したケアラーは、処罰的でない対応を採用する能力が必要である。

これは、人を非難するのではなく、社会的な行動修正により焦点をあてている。我々は、これを“人ではなく行動への挑戦”と呼んでいる。

我々が、手におえないと思っているのは、人ではなく、行動なのだというメッセージを発進することがもっと役立つのである。

43

#### 43. Consequences 1 結果

しかし、子どもたちに彼らの行動の結果には、肯定的か否定的かの結果があることを理解させることは重要である。

我々は、彼らの行動の肯定的な結果について、たとえ否定的な結果の方が多くても同じように理解することを支援する必要がある。

これは、子どもたちが自分たちは傷つけたり、破壊することが出来ることをあまりによく知っているので、自分たちが喜びを与えることをしたり、他人の気分をよくするという事を考えたことがないからである。彼らは自分たちは他人にとって無意味な存在で、自分たちが影響力を持ちなんらかの意味を感じる唯一の方法は挑戦的であることだとしばしば感じている。

我々が子どもに彼らの行動の否定的な結果について理解させ、可能ならそれを修正するために何かをする必要がある時、その行動への結果が妥当で論理的であればあるほど、子どもはよく理解するのである。

たとえば、もし子どもが家の中の何かを壊した時、早く寝かしつけられるより、それを修理するのを助けてやることもっと妥当である。壊された物を修理するのを支援することは自然な結果として理解される。

44

#### 44. Consequences 2 結果

ペリーとシュザアラヴィツが指摘しているように、

“罰することは、よき資質を引き出し、手本を示すことが出来ない。我々は、制限をする必要があるが、もし子どもたちにちゃんと行動してもらいたい時は、彼らを丁寧に扱わねばならない。愛情深く育てられた子どもは、まわりの人を幸せにしたいと願う。それは自分の幸せが周囲の人々も幸せにすることが分かっているから。かれは単に罰を避けるためにお世辞を言っているのではない。”

罰するより結果で示すことがしつづける。そこでは子どもたちに、どういう態度をとりお互いに尊敬しあう土壌をつくり、問題は、学びと成長への機会とみなされるのである。子どもたちは自然で論理的な結果を通して彼らのあやまちから学ぶことを支援してもらうのである。

45

#### 45. Discipline 規律

- 教えること
- お互いに尊敬しあう土壌づくり
- 問題は好機である
- 予防する問題に焦点をあて前例を参考に予防計画をたてる
- 当然で論理的な結果について子どもたちと話し合う
- 基準となっていることの理由を考える
- 要求の責任
- 親身な気持の価値と精神的な価値による抑制の教え
- コーチで師である大人

ローセン（Laurson2003）によると、規律の第一の目標は：“子どもたちが理由とともに、筋の通る規則と限界と結果を学ぶことが出来る安全で首尾一貫した環境を用意すること”

46

#### 46. Punishment 罰とは

- 苦痛を与える、ペナルティを科す、喪失、苦しみ、荒々しい扱い方
- 強い者を尊重しなければならない
- 問題には 罰がある
- 反応的な対応
- 専制的結果
- 私が命令したのだからやれ！
- 服従を要求
- 規則に服従することを教える
- 大人は支配者
- 外部からの強制による管理

47

#### 47. THE CARER-CHILD RELATIONSHIP AND ATTACHMENT 1 養育者と子どもとの関係と愛着

「関係」がもつ求心力

健康的で癒しとなる関係を築く原点は、紹介と受け入れの過程からはじまり、委託中ずっと続き、子どもの移動とその後順調の場合に終わる。トラウマを背負う子どもとの治療的な関係は、子どもを癒し、回復出来るようにするものである。

彼らの否定的な体験が原因で、里親委託された子どもたちはしばしば関係づくりが大変難しい。子どもたちは大人との関係は、豊かで保護的というより危険なものらしいと考えている。

これらの子どもたちは自分を守り、生き残るために極めて防衛的である。彼らは、敵意、引きこもり、無反応、隠し事、欺き、拒否で構え、一般的に近づくのが難しい。

肯定的な関係を築くための課題は、挑戦的なためし行動を前にして、忍耐と理解と常に親身で変わらずにいられる能力を必要とする。

48

#### 48. THE CARER-CHILD RELATIONSHIP AND ATTACHMENT 2 養育者と子どもとの関係と愛着

我々は、子ども時代の健全な発達には、主たる養育者との愛着関係をはぐくむ中で達成されることを知っている。これが体験できないと子どもの発達は阻害される。小児期早期に、普通に経験されるのと同じような愛着は子どもの回復に大きな影響を与えることが出来る。研究によると、代償的愛着の体験は、委託安定の可能性を高め、更なる委託不調を防いでいるという。

子どもが養育者を信頼しはじめると関係づくりには時間がかかる。目標は、子どもが十分安全と感じてなんでも話し、養育者の世話を受け入れるまでに到達することである。

子どものニーズが安全な関係づくりの中で満たされるのと同じ様に、子どもは健全な関係づくりも学ぶのである。このことは、子どもに、自分の関係づくりのスキルを発達させることが出来るのである。

大人と重要な人々との強いきずなが、トラウマを体験した子どもたちと若者の治療と長期にわたる福祉の核となっている。

養育者たちが、自分の役割に必要とする最も貴重な道具は、彼ら自身である——それは子どもたちと若者が養育者と築く関係であり、それが治療と、彼らが社会の何物か、どう参加し貢献して生きるかについてもっと肯定的に感じながら前向きに進む可能性を提供するからである。

19

#### 49. The Importance of Consistency and Continuity 一貫性と継続の重要性

子どもたちとの安全な関係を発展させるには、委託の継続が必要である。関係づくりをする子どものためには彼の委託が一時的なものでないことを知らせる必要がある。安定した養育状況を留意することはやりがいのあることでありうる。まず第一に、良質な養育者の確保が必要で、そのためには、効果的な選抜、業務の明確化、上手な運営、養育者の支援と研修が達成される必要がある。特に重要なことは、子どもたちにとって養育者が信頼でき、頼れることである。

養育の継続性を提供する重要な事項の一つは、養育者たちの間に高いレベルのコミュニケーションを保証することである。

子どもの行動上の変化は、養育者と子どもとの調和を強めるというゴールのある関わりにより達成することが出来る。この結果として養育者側の調和が少なくない否定的な結果をもたらさう。

50

#### 50. Building the child-carer relationship 子どもと養育者との関係を築くには

ローセン (Laursen 2002) は論文の中で呼びかけている：関係を取り戻す7つの習慣は、彼が重大な行動とみているものと、若者がレジリエンスの発達に必要とする関係にかかわる信念の輪郭を示している。

これらは：

1. 信頼—養育関係の第一の土台のひとつで、子どもたちに安全と安定を確立するのを助ける。
2. 注目—対話で励まし（それを続け）、彼らが必要とする時はただ彼らの側において（たとえ無言でも）、そして気を散らすことなく、あなたの凡ての注目を彼らにそそぐことにより、養育者が若者を応援し、興味を示しているという真実の注目
3. 共感—そこでは、子どもたちは心から聞いてもらえ、理解され、世話されていると感じること
4. 利用可能—子どもたちと過ごす特別な時間、必要な時に話せる時間、一緒に特別なことをする時間
5. 確認—養育者は世話をしている子どもたちに何か肯定的な面をいつもみつけることが出来る。たとえ苦闘と葛藤の中にあっても、養育者はやりぬく強さと資源をもっていることを彼らに伝えることが出来る。
6. 尊敬—若者たちが自分に影響を与える決断に巻き込まれた時に、選択肢と選択の自由を用意し、彼らに自分の人生の指揮権をもっているという意識を教え込むことで明らかにされる。
7. 美徳—養育者は子どもたちのよい手本の役割があり、何を「説教するか」練習する。

51

#### 51. Quality of Carer-Child Relationship 養育者と子どもとの関係の質

いくつかの調査研究で、養育者と子どもたちの相互作用の質が委託の成功の鍵となることが説明されている。明らかにされている重要な資質には以下のものが含まれている。

- 共感
- 近づきやすさ
- 持続性
- すずんで話を聞く
- 信頼できる

ブレンデトロ (Brendtro et al, 2002) は、以下の項目が関係構築作業の神髄となる永続的原則と示唆している。

1. 関係づくりは行動であり、気持ではない
2. 危機はチャンスである
3. 可愛くない者を愛すること
4. 葛藤のサイクルから離れる
5. 若者の信頼を得ること
6. 関係づくりは忍耐力の行事
7. 行動療法は追い出す
8. 尊敬は尊敬を生み出す
9. 喜びを教える
10. 所属感を誘う

52